

田勢 邦史

Kunihito Tasei

ペン表ソフト速攻型としての矜持を胸に、ひとりのサウスポーがラケットを置いた。全日本選手権でダブルス種目で4度の優勝に輝き、シングルス2回の表彰台にも上がった田勢邦史。人なつこい笑顔の裏に隠された、彼の卓球への強い思い。現役に別れを告げながら、新しい道を歩み出そうとしている男がいる。

インタビュー 今野昇
写真 江藤義典 (photography by Yohannes Eto)



The Game-Ending Interview

●たせいくにひと
1981年9月20日生まれ、山形県長井市出身。長井南中から青森山田高へ進み、インターハイ団体3連覇、ダブルス2連覇。青森大を経て、協和発酵キリンに入社し、全日本選手権男子ダブルス2回優勝、混合ダブルス2回優勝、シングルス3位(平成19年度)入賞。世界選手権横浜大会日本代表。3月末に協和発酵キリンを退社し、4月からはナショナルチームコーチに就く

1秒でも長く
あのコートにいたくて、
間合いも長くなった。
そこは特別な場所だなど
思っていた

全日本選手権のダブルスで4回優勝し、ペン表ソフト速攻型として日本の卓球界で存在感を示してきた田勢邦史が現役を退いた。爽快な速攻卓球とあふれる闘志。卓球と向き合う真摯な態度と、その人柄の良さも選手間では評判だった。

3月末には会社を辞め、ナショナルチームのコーチとして第二の卓球人生を歩む。卓球を愛し続ける男のインタビューである。

——現役を退いた、今の心境は？

田勢 すっきりしてますね。終わって日にちが経ったら違う感情が出てくるのかなと思っていただけ試合を終えた時と同じですね。幸せな卓球人生を歩ませてもらったし、周りの人々への感謝の気持ちしかない。後悔は全くないですね。

(現役を)やめるのを決めたのは1年前の全日本で、ラン決で大矢(東京アイト)に負けた時です。それまでは引退なんて全く考えていなかった。全日本ではランク入りひとつの目標で、大矢とやっている時に3-1とリードして、点数もリードしていたのに負けるのが怖くなって、やりたいことができなくて負けた。守りに入っている自分がいて、なんであそこで焦っていたんだろうと思った。そこで反省して、出した結論があと

1年で終わろうということでした。

——ボロボロになるまで卓球を続ける人もいるし、ある程度できてスバツとやめる人もいます。

田勢 ひとつは体です。気持ちはまだできるというのがあったけど、全日本に向けての準備段階で、3年前から大会前に偏頭痛が出てくるし、体調がうまく合わせられなくなっていた。ペン表として技術が進化することもないし、現状維持で、その日の自分の調子だけで勝つか負けるか決まる。自分が進化しているから勝てるんじゃない。相手が表ソフトを苦手としていたりとか、たまたまスマッシュが入って勝敗が決まる。3年前からモチベーションを保つのが難しくなって、体も調整できなくなっていた。大矢に負けて半年間は引きずっていたけど、次の全日本で終わらだと感じていました。

——この1年間は(協和発酵キリン)監督兼選手ということもあり、団体戦での出番も減っていた。

田勢 自分ではあと1年と決めていました。全日本の結果が良くてあと1年でやめると決めていた。でも大会が近づいてくるとやっぱり偏頭痛が出てきたり、朝起きたら目まいがすることもあった。年が明けてもそうだった。それだけ重圧があったのかな。

ところが、今年の大会の2、3日前になったら、卓球がすごく楽しくなった。あと卓球できるのは1週間かと思っただけ、緊張とかじゃなくて、卓球を始めた時の気持ちになって、すごく楽しむ気持ちがあった。このままでいたいと思いま

した。そういう気持ちは初めてでしたね。

——初めて全日本に出たのは？

田勢 高校2年で一般とジュニアに出た記憶があります。それからはずっと出ています。

——今回の最後の試合は後輩の高木和卓選手でした。

田勢 卓とは絶対やりたかったから、そこまでは勝たなければいけないと思ってました。卓とやるのはすごく久しぶりだったし、彼も強くなっているから挑戦したかった。でも試合の1本目で彼のボールを取ったら、すごくボールが重くなっていて質が違っていた。点数を離さ

「幸せな卓球人生を歩ませてもらったし、
周りの人々たちへの感謝の気持ちしかない。
後悔は全くないですね」

れた時にいろんな思い出がまるで走馬燈のようによみがえりました。卓球を始めた時から、全日本ダブルスの優勝とか、いろんな指導者の顔も出てきたりした。1秒でも長くあのコートにいたくて、間合いも長くなった。そこは特別な場所だ

なと思っていました。最後はスマッシュで終わろうと思ったらすごく厳しいツツキが来て打てなくて(笑)、ドライブでつないだら卓のバックドライブでフォアを抜

かれた。終わって握手をした瞬間、卓に「お疲れ様」と言われた時にグッと来ました。彼も世界選手権の代表がかかってい

る大会なのに、卓からそんな言葉をかけられると思わなくて、あとは(涙で)ダメでした(笑)。卓球をやり切った気持ちだったし、最後の試合が卓で良かった。

——もともと卓球を始めたのは山形県の長井市ですね。

田勢 はい。母親が卓球をやっていたので、小学校4年生の10歳の時に、母について行って卓球を始めました。中学校は長井南中で、卓球を始めた時から卒業するまで地元の八郷秀晴さんに教えてもらいました。ほくを卓球に導いてくれた母親にも感謝したいですね。

中学時代、全日本のカデットのダブル

スでは優勝。3年の時に東北大会で優勝したけど、全中(全国中学校大会)は1回戦負け。東北大会で優勝した時にちょうど吉田安夫先生が新しいチームを作るので選手を探していて、目に留まってその場で声をかけられました。

——青森山田に行って、1年の時にいきなりインターハイ団体優勝。高校、大学時代を青森で過ごしました。

田勢 ほくにとって吉田先生に会場で声をかけられたのは大きなターニングポイントになりました。東北大会に先生が見に来てなかったら僕は青森に行ってい

いし、今のほくもない。高校の3年間はあつという間でした。みんなで同じ目標を持って、切磋琢磨していた。

——全日本でランク入りしたのは？

田勢 社会人の4年目で、3位に入った時です。社会人の1年目でシングルスではノーランカーだったのに倉嶋(洋介)さんとダブルスを組んで優勝してます。協和発酵キリンに入社した時はまわりがみんな強かった。田崎(俊雄)さん、徳村(智彦)さん、倉嶋さん、木方(慎之介)さん、真田(浩二)さんなど、全日本のベスト4とか8の選手ばかりだった。その中で全日本選手権は特別だということを教

えてもらったし、ここで勝たなきゃいけないというのわかったし、みんなの全日本への意気込みを背中を見て感じていたら、自ずと結果が出てきた。

——ダブルスでは男子ダブルスで2回(パートナーは倉嶋洋介)、混合ダブルスで2回(パートナーは田勢美貴江)で、合計4回優勝しています。

田勢 社会人として9年間プレーしたけど、1年目で全日本社会人のダブルスも優勝しているし、世界選手権も出て、いろんな経験をさせてもらったし、充実してました。横浜大会の時、日の丸を背負うことはもちろんプレッシャーで責任もあるし、重かった。最初はいれなかった

ろうと自問自答している中で、昨年10月に倉嶋さんが監督に就任した時に（スタッフ入りの）話をもらって、新しく踏み出そうと決めました。美貴江にも相談したら、「すごい話をもらったね。挑戦したらいよいよじゃないの」と言われ、背中を押してもらいました。協和発酵キリンは良い会社だし、バックアップしてくれる体制もあったし、入社してからコンスタントに成績を出せたのは、素晴らしい職場の方、先輩、監督がいたからこそ。卓球に没頭できたのは会社のお陰だし、最大限の理解をいただいたことに、本当に感謝しています。

引退した後に会社に恩返しをしたいと思っていましたが、自分の心に嘘をつけなかった。ぼくは器用なほうじゃないので、中途半端は嫌なんです。選手もやって、監督もやって、協和スクールの指導もやった。この1年間正直辛かったし、自分が得たものが少なく、消耗した感じがする。ぼくの先輩たちが後輩に伝えてきたように、ぼくが後輩に伝えなくてはならない立場になったのに伝えることができなかった。それが悔しかった。だから中途半端なことはやめようと思いました。

会社の理解の中でバックアップされてきたのに、どう恩返しするのか、でも自分の夢もある。そこはすごく悩みました。指導者になるという夢は自分の中で大切なものだった。会社から離れたとしても、新しい場所、違うところでも協和発酵キリンという会社には恩返しすることができると、卓球界にも貢献できると思った

けど、合宿を重ねることに責任が重くなりました。

——奥さんの美貴江さん（元世界代表）の存在はどういうものだったんだろう。

田勢 お互いが選手の時というのは、間違いなく美貴江のほうが成績は上だった。彼女も頑張っていて、ぼくが見習う部分、尊敬する部分もあった。そしてお互いが同じ目標に向かって頑張っていた。一番近くについて、一番目標にしていたひとりで。彼女が引退してからは、ぼくが全日本前に緊張している時、彼女は感じ取ってくれる。その中で言葉を選んでくれる。わざと話しかけないとか、変な言葉をかけないとか、気を遣っていたと思います。支えるというのはそういうことなのかもしれない。そして、ぼく自身、心や体も準備していくのが大変な時

「選手をサポーターとして、選手と同じ舞台で日の丸を揚げて優勝やメダルの感動を味わいたい」

日本を代表する指導者に巡り会ってきたから、今のぼくがある。自分の卓球人生は悔いがなく、順調にキャリアを積めた

——最近トップ選手の中にペンホルダーがだんだんいなくなって、今年は男子のランカーにペンがひとりもいなかった。ペンホルダーとして誇りとスタイルへのこだわりもあったと思う。



貴重なベン表ソフト速攻型として卓球人生を全うした田勢



最後の全日本選手権。ランク決定戦で後輩の高木和卓に敗れた田勢は試合後、応援席に向かって深々と一礼した

に、自分を支えてくれる人、美貴江と子どもの永翔のために頑張ろうと思えた。

——田勢君は指導者として実績がないわけ、そこに対して疑問を投げかける人もいでしょう。そういう中で、自分は何ができるのか、才能豊かな選手がいる日本のナショナルチームの中で何ができるのか、選手にどういうコーチングができるのかを考えたと思います。

田勢 当然それは言われると思うし、覚悟しています。ただ言われれば言われるほど早く成長していけると思っています。もちろんこれから指導者として勉強はしていますが、自分のことよりも今の日

田勢 シェイク全盛期の中でベンが少なくなってきた、そういう中で「私もベンなので応援します、頑張ってください」と声をかけられることが多かった。それが励みになっていったし、自分のモチベーションになっていったし、ペンホルダー表ソフトとして自分のプライドもあった。世界選手権やオリンピックではペンホルダーが優勝することが多くて、そういう中でベンも全日本の頂点に立てるはずだと思って頑張っていました。

実際にしんどいです。進化するのが難しく、限界があるし、やる前から弱点を抱えているようなものです。その弱点を見せないような練習もしなければいけなかった。

——この20年間の卓球人生を振り返って感じる部分はありますか。山あり谷あり……。

田勢 谷はなかった、山も小さかったけど（笑）。試合よりも、その試合までの過程が大事で、やることやって負けたらしょうがないと思ってしまう。ベン表ソフトだから、打って入らなかったらしょうがない。入ったら勝つ、入らなかったら負けるとはつきりしてるから。

ぼくが出会った指導者はレベルの高い人だった。長井はぼくがいた頃は長井南中と長井北中がライバルとして競い合っていて、その中で八嶽さんに熱心に教えていただいた。それで吉田先生と出会って、大学では河野（満・元青森大監督）さんにも出会って、バックハンドを取り入れたら、ナックルドライブやナックルスマッシュ、打ち方をいろいろ覚えなさいと言われた。そして協和では佐藤真二さん、というように、日本を代表する指導者に巡り会ってきたから、今のぼくがある。自分の卓球人生として順調にキャリアを積めたし、悔いはない。すごい指導者と出会えたと思います。

——3月末で協和発酵キリンを退社し、ナショナルチームのスタッフとして新しいスタートを切ります。超優良企業を辞め、安定した環境を捨て、保証のないプロコーチとして、しかも日本代表を指導する重要なポジションに就きます。

田勢 昔から指導者になりたいと思っていました。引退して自分はどうするんだという理想もあります。

今、スポーツの指導者はその本質を問われているけれど、コミュニケーションは大切にしたい。昔は「言うことを聞きなさい」というやり方で良かったけど、今は指導者も若くなっている。選手とのコミュニケーションを取ることは大切だし、コミュニケーションを取りながら選手のモチベーションをどう上げていくのかを考えていきたい。

日本の選手たちが大きな舞台で成果を上げられない、メダルを獲れないというのは悔しい。でも一番悔しい思いをしているのは選手です。最終的には、世界選手権やオリンピックの舞台で選手をサポーターとして、選手と同じ舞台で日の丸を揚げて優勝やメダルの感動を味わいたい。そして、メダルを獲り続ける日本のチームであってほしい。その中でこれらの若い選手や卓球界の人たちに心から応援してもらえれば選手を育てていきたいと思っています。

彼の笑顔はすべての人を魅了する。しかし、これからは全日本コーチとして優しさだけでなく、倉嶋監督との二人三脚で、全日本男子チームを厳しく牽引することを求められる。涙もろい監督とコーチ。その二人が大舞台で選手と抱き合い、うれし涙を流す姿を早く見てみたい。

（文中敬称略）



田勢を支えた美貴江夫人と長男・永翔くん

「ぼく自身、心や体も準備していくのが大変な時に、自分を支えてくれる人、美貴江と子どもたちのために頑張ろうと思った」